

こころ日記「ぼちぼち」その②

脇野 千恵

中学校から…

久しぶりに中学校現場にデビューしたころ、どうしても小学校免許を取得しなかった私は、通信制の大学に編入しました。学科の勉強は、土日にスクーリングに通いながら単位を取ることができましたが、教育実習の単位取得という課題が残り、当時4週間の実習先の学校をどうしようかと悩んでいました。大抵は出身の小学校にお願いするのですが、私自身故郷からは離れてしまっていたので…。

私の悩みを聞いた職場の同僚が、

「うちの学区のT小学校に頼んでみたら？」

と声をかけてくれました。交渉の結果、その小学校に行くことになりましたが、4週間の実習期間、勤務先の中学校を休むことはできません。

みかねた学年主任が、

「毎日、中学校の授業が終われば、T小学校へ行けば？実習が終わったら、また中学校に戻ってくればええやん。なんとかなるよ」と言ってくれました。

“え～本当にいいの？”と思いましたが、そんなことができるならと、同僚たちの言

葉に甘えることになりました。

それからの4週間、私は中学校の国語の授業を済ますと、T小学校に急いで行き、小学校の教壇で実習をし、時には小学生の子どもたちと給食を食べ、また中学校に戻り、授業をするといった生活を続けました。今から振り返ると、我ながらよくやったなと思っています。

今は、そのようなことは許されないでしょうが、30年前は、ある意味いい時代だったのです。勤務先の同僚と、30歳を過ぎた学生を、快く引き受けてくれたT小学校の実習担当O先生には、本当に今でも感謝しています。

無事に小学校免許を取得した私は、そのことが縁で、次の年T小学校に勤務することになりました。それから約10年ばかり、小学校の先生として、頑張ることになったのです。

小学校の先生へ

ちょっと荒れた中学校にいたので、小学校勤務は、とても新鮮でした。基本的に小

学校では、臨時講師であれ担任をしなければなりません。初めての担任は、2年生のクラスでした。ごつごつとした思春期の中学生とは違い、体も小さい小学生は、本当にかわいいとしか思えませんでした。

小学校の先生は、一日中教室にいて、全教科を教えなくてはなりません。子どもと過ごす時間も長く、色々な活動をして触れ合うことができました。授業を飽きさせないために、日々教材づくりにも専念しなければなりません。

今、そんなことをやっている先生は少ないでしょうが、私は、毎日「あのね」ノートを書かせていました。文章の出だしが、「先生、あのね…」から始まる日記です。

一人ひとりの毎日の「つぶやき」を読み、返事を書くことが楽しみでもありました。今も、当時の子どもたちの日記を残していますが、30年前の子どもたちは、今の子どもたちより、書くことができていたなと思います。

中学校では、「生徒指導」担当というものがあり、厳しく生徒を追及したり、叱ったりする場面が多々ありました。そんな環境にいたので、つつい小学生の問題行動についても、思春期の子どもたちと同じような接し方をしてしまっていました。

何か問題が起きると、子どもを別室に連れて行き、「本当はどうなの？」と問い詰めるなど…。言葉遣いも荒かったような気がします。

ある時、他の先生から、「先生、ここは小学校ですよ！子どもの指導には気をつけてください」と厳しく言われてしまいました。ちょっとショックでしたが、確かに許されない対応だったなと反省したものです。間違ったことには、厳しい態度でのぞむことが必要だと思ったのですが、中学校と小学校での問題への対応の違いに、戸惑うばかりでした。

長靴事件

初めての2年生の担任の2学期が過ぎたころ、下駄箱に入れてあったM恵ちゃんの長靴がなくなっていました。中学校では、そのようなことは結構ありましたが、まさか小学生が靴隠し？と。忽然と消えた長靴に、M恵は泣くばかり。

「どこかに置き忘れてきてない？」
「本当に長靴履いてきていたの？」
内心きっと誰かが隠したに違いないと思いました。誰なのか？だからと言って、全体への「厳しい指導」はできません。

小さい子ほど、びっくりするような残酷なことをします。幼いからこんな事はしないだろう思いがちですが、実はそうではないということが分かってきた矢先の事件でした。

なかなか良い案が浮かばないまま、とりあえず、みんなで長靴探しをしようということになりました。毎日帰りの会が終わると、クラス全員で学校中のごみ箱や校舎の裏、溝などを丹念に探してみました。

「先生なかったよ」
「そっか、なかったかあ…。どこにいったんやろうね～」
と、答えるしかありません。

10日ばかり経ったでしょうか。下校時にクラスのK太郎が、「先生、僕、公園でM恵ちゃんの長靴見たと」と、言いに来ました。「明日、持ってきてあげるわ！」と言って、走り去っていきました。

あれほどみんなで探したのに見つからなかった長靴が、どうして公園に？不思議な発見です。

K太郎は、何かにつけいたずら好きで、とても乱暴な行動をする子でした。自分の

気持ちをうまく伝えることができず、周りからは誤解ばかりされていました。学級経営の中で、彼をどう扱ったものか、悩みの男の子でした。

そんなK太郎が、長靴を発見してくれたとなると、クラスみんなは、きっと「K太郎すごい！」と褒めてくれるに違いありません。

次の日、K太郎は、M恵ちゃんの長靴をもって登校してきました。どうも臍に落ちないところもありましたが、私は、彼に感謝の気持ちを伝えました。

放課後、K太郎に手伝いを頼むことを口実に、話をすることにしました。

長靴は、どこにどんなふうに置いてあったの？いつごろ見つけたの？根ほり葉ほり聞くうちに、目に涙が。やっぱりそうだったのかと気がついた私は、彼と共に家庭訪問をすることにしました。

K太郎は、祖母に育てられていました。母親とは小さい頃に別れてしまい、父親の元に。父方の祖母が、仕事で留守がちな父親の代わりにK太郎の世話をしていました。

「欲しい物は買い与えて、何不自由なくしているのに、どうして…」と涙ぐむ祖母。

K太郎は、長靴が欲しかったわけではありません。

クラスみんなと一緒に長靴探しをしたこと、そして、あの10日間を共有できたこと。そのことが、何より彼自身を大きくしてくれたのではないかと思いました。

つづく